



清水光子

『ことばへの旅Ⅰ～Ⅲ』 森本哲郎 角川文庫

つねづね放浪癖のある私が「旅」ということばに惹かれてこれを手にしたのは数年前であった。ここに取り上げられていることばは、古今東西のさまざまな分野の人達、ヨブ記から、哲学者、文学者、科学者などの言論、著作などから採られている。それを著者は、人間につい

て、希望について、文明について、魂の深さについて、読書について……などという旅の道でまとめて、ただ単にことばを解釈しているのではなく、著者の透徹した思索を通しての哲学として語られているのが、むしろかしい哲学書を肩こらして読むようではなく気持安らかに我胸にしみ込んでくるという工合なのである。

例えば驚きについてという「道」では「びっくりした」というのが僕の願いなんです。不思議な宇宙を驚きた

いという願いです」（国木田独歩）のことは採り、今、宇宙時代に入っているときの子どもたちの心に、この言葉を考えて欲しいと思った。そして「単純なものを宿している」（ハイデッカー）「人間社会に固有で偉大な活動にはすべてはじめから遊びが織り込まれている」（ホイジンガ）のことは、私たちが日頃安易に考え、口にしてる遊び、こどもの遊びについても深く掘りさげて考えてみる必要があるのではないかと思ったことである。「帰らぬむいざ、田園將に蕪れんとす」というあの陶淵明の詩に至って、今我国の幼児教育のことを思うと、將に蕪れんとしていること、ここで原点に帰らぬむいざと声を高く叫びたいような衝動に年甲斐もなくかされたものである。「君子は淡くして以て親しみ、小人は甘くして以て絶つ」との友人について、の道の中にあることは、このような友と手を携えて……、と切に念じたのである。

『名作の旅 伝説の旅』 森本哲郎 角川文庫

これは第一部は世界名作の旅で、「異邦人」「カルメン」

「アンデルセン童話集」「ドン・キホーテ」「アラビアンナイト」「希望」「キリマンジャロの雪」「車輪の下」が採られ、それらの名作の舞台となっている地に著者自ら旅をしての情景など、私も何度か訪れている地もあって、楽しく思い出のアルバムをひもとく思いでよんでしまったが、読後感の何とさわやかなことか。第二部のアメリカ名作の旅、第三部はスペイン組曲としてアンダルシア地方が舞台となっておりひろげられる「セビリア」「グラナダ」「チゴイネルワイゼン」「コスタ・デル・ソル」であるが、それぞれのアリアやシンフォニーが耳にきこえてくる思いであった。そして第四部のエーゲ海の旅は島めぐりをしたときのコバルトブルーの海と空、大理石の柱廊にひめられたギリシャ・ローマ神話の美しく、悲しい伝説などを鮮やかに心によみがえらせた。

こうしてあこがれつづけた「旅」は、人間への遙かなる旅、生きがいの旅、ゆたかさへの旅、と道幅を、道程をふやしつづけ、今しも人生の旅が終ろうとしている私に、つねに道しるべともなっている。そして、ぼくの旅の手帖で、エピローグに「ぼくたちの住むかけがえのない地球は旅人である。彼は太陽のまわりの空間をゆっ

くり旅している。(中略) 太陽もまた旅人である」とあ
る。ああ。

『愛の重さ』『春にして君を離れ』

『未完の肖像』

アガサ・クリステイ

学生時代に英語の教科書でめぐりあったシャーロック
ホームズ(コナン・ドイル)の短篇から、当時中学生だ
った息子達とシャーロックアンを自認していた私は段々探
偵物に興味をもった。そしてこれも学生時代の教科書が
きっかけで、アガサ・クリステイの作品にのめり込んだ
のはもう十数年前になるうか、でもここに出したのはい
わゆる探偵物ではない。クリステイが別名でかいた小説
である。イギリスの中流以上の家庭の女の生きざま、
人生観、社会観などが肌目細かい、手ざわりの暖いふく
よかな織物で仕立のよいドレスを仕上げてみせてくれ
ている感じである。私はこれらの本を若い女性、お母様達
に推薦するというのはこれをお手本にしたら、とか面白く
て為になりますからでもない。感じてください、とのみ
いうわけである。

『鬼平犯科帖』(1)~(9)

池波正太郎

テレビでも放映されているが、今までに第9巻が出て
いる。江戸中期の江戸で鬼の平蔵と盗賊どもから恐れら
れている火付盗賊改メ方という、今なら犯罪特別機動隊
のような役の長官をとりまく人間模様が、精巧、重厚な
織物のようなたしかさの中に人間味溢れる暖かさという
モアをこめてえがかれている。私の睡眠薬といって、ベ
ッドのわきに積ん読である本のうち、これはめざまし薬
になつてしまう夜も度々である。電車の中ではこれは読
まないことにしている。乗越して、駅の人に「おばあさ
ん、今日ただただ戻ってもいいけどもう駄目だよ」と
言われるのはまっ平だから。

活字中毒症のような私であるが、こうして乱読してい
る中で、すばらしい本にめぐりあうしあわせをしみじみ
感じながら、ますます中毒症状が昂進していくようであ
る。

(東京・音羽幼稚園)